



Publishinghouse:2-19-32Moriyama Kanazawa
JodoShinsyu Jhokoji Phone&Fax076-252-4922
www.jhokoji.net/ info@jhokoji.net 2020.11.01

小学生が教えてくれたこと

道因寺住職 相馬 豊

白山市の道因寺で住職をしており、相馬豊と申します。どうぞよろしくお願いたします。

今程ご紹介の中にもありましたように、昨日は親鸞聖人のお言葉であります、「世のなか安穩あんゑんなれ、仏法ひろまれ」、そのお言葉を訪ねてまいりました。私達は念仏を申しているんですけど、念仏ひとつということを繰り返言われていても、自分の心の中にはもうひとつの心がある。その心というのが、自分が一番可愛いという心です。その心で物事を見ていく。災害に遭った地域の

り様を照らし出してくれる声です。痛いところを突いてくださるその声を聞けば、その時、ハッと気づくということですね。

体解と理解

今、「三歸依文さんきえもん」を唱和いたしましたけれど、その「三歸依文」の冒頭の所にですね、

自ら仏に帰依たてまつる。大道を体解たいげして、無上意むじょういを發おこさん

ここに「体解して」という言葉がでてきます。「体解」という言葉に対して私達は何をするかというと「理解」ですね。学校教育で学び、その学校教育に基づいて現代の価値観の中で生きていく時、私達は常に理解ということが中心にあります。理解しようとする。こうやって仏教のお話や真宗のお話を聞いていても理解しようと、そのことに主眼がいつてしまうわけです。

ところが長い仏教の歴史でいうと、仏教は理解するのではなくて、

身体でわかる、身体で頷くということ。身体というものは、この身体です。身体というものは、この身体です。身がその事実に出た時に、頷いていく。しかし、理解は頭です。頭で考えて頭で分かることを理解という。理解した時にそこに必ず何が起るかという、評価されるといふことです。現在、評価は必ず点数で評価します。私も苦しめられましたが、テストというもので評価して点数でそれがパンと出てくる。点数が低いと理解度が悪いというかたちで言われる。現代というのは理解するということが、主眼になつていくんですけど、仏法を聞くというのは理解ではないんですね。身体で頷いていけど。だから体解ということが非常に大事なことになるんですけど、その体解というのは自分で頷くことは出来ません。自分と関わる人や周りの人の生き様、生きる姿勢を通して、頷かざるえないものに初めて出会った時、初めて体解という了解が出て来ます。

理解というのは物を読んだりして色んな知識として私の中に入っ

てきます。体解というのはなかなかしんどいです。現実を生きている人の生き様や、言葉に出会うことを通して自分に頷いていく。そういうことで体解ということをお教では大事にされてきているわけです。私自身、この体解ということをお教では、この十月までの間に、普段の日常生活の中で当たり前だと思っていたこと、あるいは見失っていたことを改めてその生き様、生きる姿を通して教えていただきました。それを教えてくださったのは小学生です。小学生は私にその現実生きる中での姿勢というものを教えてくださいました。

姉妹の言葉

まずお一人というのは、二人の姉妹の女の子です。今年の五月三日、連休の日、家族で遠出のドライブに行く予定になっていたんですけれども、その三日の早朝にお昼のお弁当を四人分作っていたお母さんが、急性心不全で亡くなりました。そして後はもう、葬儀屋さんを介してお通夜、葬儀ということでスケジュー

ルが組まれていきました。そのお通夜と葬儀の折に、この小学生のお姉ちゃんとお母さんから生きる姿勢、真摯な姿勢を改めて目の前で教えたいただきました。お通夜の席ですけども、その折は、『阿弥陀経』、『正信偈』のお勤め、そしてお通夜の話、ということかたちでお通夜が組まれていきました。『阿弥陀経』は僧侶が読む方が多いわけですけど、『正信偈』になりまして、やっぱりそのお通夜に参詣された方々も一緒に『正信偈』のお勤めをされます。

私が『正信偈』の調声というかたちで「歸命無量寿如来」という声を発しました。その後ですね、ご承知の通り、「南無不可思議光」と始まり、「唯可信斯高僧説」まで『正信偈』の言葉が続くわけですけど、その折にですね、こういう言葉が聞こえてまいりました。「南無」、「思」、「法」、「菩薩」、「在」、「自在」、「觀見」、「国土人天」、「建立」、「無上」、「超發」、「希有」と、こういう風に、『正信偈』をたどたどしく、飛ばしながら読む声が聞こえてまいりました。その『正信偈』の声は、お通夜に参詣されて

いる方の声と同時に聞こえてくる。必死に『正信偈』の声を聞いて読んでいく声です。そして「唯可信斯高僧説」まではたどたどしく、飛ばしながらもその声が続きましたけれど、「念仏和讃」になると、その声は聞こえなくなりました。

そしてお通夜のお話を終えてからその声を出された方の所へ行きまして、「今ほどは一緒に正信偈のお勤め本当にありがとうございました」と声を掛けました。その私が声を掛けたのが亡くなったお母さんの子供達です。小学校に通う、お姉ちゃんとお母さんの横に座っていたご主人のお母さん、子供達にしてみれば、おばあちゃんに当たる方がこういうことを語って下さいました。

「実は昨日の枕経が終わって、晩の夜伽が始まる前に、子供達には大谷派の赤い勤行本をそれぞれ一冊ずつ渡しました。今日からこの書かかれている『正信偈』というものを声に出して読むんですよということを言いました」と。その子供達は、夜伽、仮通夜が終わった後、しばらく家族

といたわけですけど、ふっと見たら二人の子供がいらないんですね、姿が無かった。どこへ行ったんだろうかと見たら、お母さんの横に座って、二人して勤行本を開いて、そして「き」、「みよう」、「む」、「りよう」、「じゅ」、「によ」、「らい」、「な」、「む」、「ふ」、「か」、「し」、「ぎ」、「こう」、「ほう」、「ぞう」、「ぼ」、「さ」、「いん」、「に」、「じ」、こういう風に『正信偈』の横に書かれている送り仮名を二人して声に出してずっと読んでいました。実はこの二人の子供達はほとんど昨晩は寝ていません。お母さんの横にずっと朝方まで座って二人して一生懸命この『正信偈』の送り仮名をずっと読んでいました」と。

その声は今、お通夜のときの声となったのでしょ。緊張もあるし、初めてのお勤めだから、「上手く読めなくてご迷惑をかけたんじゃないでしょうか」と聞かれましたけど、「全然ご迷惑ではないですよ」と。逆にその姿がですね、やっぱりある意味大事なことを伝えてくれた。

そして翌日の葬儀の折も同じようにたどたどしく、詰まりながらも、

一生懸命出している声がまた聞こえる。葬儀が終わった後にですね、二人の所に行つて「一緒にお勤めしてくれてありがとう」と声をかけました。そうするとその時もまたおばあちゃんがですね、私にこう言いました。家での最後のお別れをして、亡くなつたお母さんが棺に入つて、家を出て、そしてこちらの会館にくる車の中で、お姉ちゃんがこんなことを言ったという。「私達二人の声がお母さんに届くかね」、こういうことを私に語りかけてきたと。私は思わず「きつと届くよ」とこう言つてしまいました。後は言葉を濁したんです。

確かに棺の中に入つてお母さん。前日まで夕食過ぎてまで一緒に家族団欒でいつものように過ごしてきた。ところが五月三日の早朝に急性心不全で亡くなつていった。連休の思い出づくりとして家族四人で楽しく過ごすために昼食のお弁当まで用意して台所のテーブルに並べていたその横で倒れていた。そのお母さんに子供達二人がですね、声を出してお母さんに声が届くかなと、その声を届けようと必死になつて、『正信

偈』のお勤めをされた。

そのことをおばあちゃんからお通夜の晩、そして葬儀の後に聞いた時に、私達はいつの間にか、本当に大事なことを忘れていたんだということがそのことを通して思い出されました。

聞き、考え、声に出す

私達は『正信偈』といえ、勤行本を開いて、そしてその『正信偈』の横に書かれている節符せっぽうしながら声を上げ、声を下げていく。草四句そうしく目下めげですから四句目で声が下がるということば練習すれば覚えていく。しかし、それが慣れつこのようになつていった。

最初から『正信偈』というものをあの節符通りに読める人はまずいないでしょう。まず私達は一番最初に何をしたかという、この小学生の姉妹がやったのと同じように送り仮名の平仮名をまず素読、読むということを通して練習を始めていったんではないでしょうか。読むと言つても簡単に読めるものではないですよ

ね。一文字、一文字、本当に詰まりながら読んでいく。

最初から『正信偈』を練習するとうかたちで、『正信偈』に出会う人もいるかもしれませんが、多くの方々は、大切な人を亡くした時に出会ったんではないでしょうか。ほとんどの方は大切な人を亡くした時に初めて『正信偈』というものに触れていく。

そうすると、その『正信偈』の一文字一文字や送り仮名は、私達一人一人のどうにもならない、辛くて悲しいものを一文字一文字が包んでくれないながら声に出してきた歴史であつ



たのではないのでしょうか。あの一文字一文字が、私達一人一人の辛くて悲しい思いを全部見てきた一文字一文字ではないか。その姉妹から改めて大事なことを教わりました。

そのきっかけは、おばあちゃんです。これから夜伽、仮通夜、お通夜、葬儀、その後の七日参りでも『正信偈』を読みますよと。そのおばあちゃんの声を聞いたということですね。おばあちゃんから真宗大谷派の赤い勤行本をそれぞれが一冊ずつ手渡された。手渡された時、私達は、どうでしょう。まあ開きますよね。ああ、こういうものかといつて開きます。でも開いてもそこで終わる人もいるわけです。ああ、こういうものかと思つて本を置く。

でも二人の小学生は開いた後、何をしたのかです。おばあちゃんから『正信偈』のお勤めをするんですよという声を聞いた。そして勤行本を手渡された。二人は考えたんですよ。中身は何か。お母さんに私達二人が何ができるか考えたんですよ。本を閉じる、それでもいいわけです。でも考えたんです、二人は。お母さん

のために何ができるかを考えた。考えて次に、お母さんの横に座って声に出した。大事なことではないでしょうか。この三つです。聞いて、考えて、声に出した。

本を頂いた。これを読んで、ああそうかと思つて終わる。普通ならここで終わるかもしれないです。考えないです。悲しみの中にあるからこそ、なかなかその次の行動は取れないです。取るとすれば、お母さんの横と一緒に寝ようかと考えるかもしれないです。それも行動です。考えた行動です。でも二人は声に出したわけですよ。それも朝方まで一生懸命『正信偈』の送り仮名を読み通していく。私達の声がお母さんに届くようにと。これが大事なことではないでしょうか。聞き、考え、語るということです。これは基本なんですけど、この基本がいつの間にか私達はもう当たり前のこととして見えなくなっている。でもこれが一番大事なことになる。でもこれが一番大事なことになる。聞いて、考えて、

声に出す。確かに小学生のお二人の姉妹の声は、ただただしく詰まりながらです。でも一生懸命なんです。

一生懸命に詰まりながらもお母さんに私達二人の声を届けようとお姉ちゃんとお母さんが声を出している。生真面目というか真摯な姿勢です。上手であるとか下手であるとか、そういうものを度外視したものです。つまり理解ではないんです。身体で訴えているわけですよ。『正信偈』というものを覚えて何か声を出すんでなく、今自分がお母さんという尊い人を亡くした時に、そのお母さんに私達は何ができるか考えて、そして声に出す。下手でも詰まりながらもそこに声を届けようという自分達の姿勢が二日間、ずっと一貫してました。

帰るべき原点

今年多くのスポーツ界で色んな問題が起こってきていました。そのきっかけになったのが日本大学のアメリカンフットボールの試合中の出来事です。そしてその後、タックルをした日大の選手は記者会見をしました。私、あの記者会見を見ておりまして清々しいものを感じました。

その記者会見を開くまでの時間の中で彼は彼なりに考えたわけですよ。考えて、そして自分の声を出した。その考えがどこに帰ったかというルールです。アメリカンフットボールというスポーツのルールに帰ったんです。原点です。ルールに帰った時に自分のやったことはどういうことだったのかということ語ったんです。

ところがその記者会見を受けた後の監督とコーチ。皆さんにはどういう風にあの姿が映っていたでしょうか。監督、コーチは自分を守ること必死でしたね。我が身に害が来ないように自己防護、自己防衛。だから合わないんですね。あの監督とコーチは帰る場所を知らなかったんです。帰る場所、ルールです。選手はルールに帰ったんです。基本に。ところが監督とコーチは自分の身を守るといふ所に立ってしまつて、ルールを忘れてるんです。

つまりこの少女達は、私達に帰るべき所を教えてくれたのです。『正信偈』を学んで『正信偈』の内容を学

ぶということではないんです。自らのこの悲しみの中で何が出来るか、そこに帰った時、声に出そうと。詰まりながらも、ただただしくても、一生懸命にお母さんに私達の声を届けようという原点に帰ったんです。何かそれをですね、私自身もいつの間にか忘れていたなど。

お寺でも『正信偈』のお勤めはいたします。あるいはご門徒さんのお家に行つてお内仏の前でも『正信偈』のお勤めをいたします。ところが、いつの間にか慣れっことになってしまつていたなど。帰るべき原点はどこだったのだろうか。それぞれの大家族が大切な人を亡くし、月日は隔てて来ているけれども、その大切な人を失った悲しみや喪失感は消えていないはず。その心をいつの間にか私自身が忘れていたなど。お勤めというかたちで『正信偈』のお勤めはしたけれども、その原点は悲しみやと。大切な人を亡くした悲しみの中から『正信偈』の声となつて、その声を通して悲しさを背負いながらも生きる喜びをお念仏の中に見出してくれた声。そのことに出会つた

三年生の男の子の言葉

方々が『正信偈』というお勤めを今日まで伝えてくれた。長い歴史ですよ、人間の。悲しみの中にこそ大事なものがあり、その大事なことを言葉として語りかける声、この姉妹の声と姿勢を通しながら、改めて私自身も原点、帰るべき所というものが二人の真摯な姿勢から伺いさせられました。

す び
す む さ く
そしてその葬儀が終わってから初七日までの間、さらに初七日が終わってから七日、七日のお参り、四十九日の法要、そして現在はお母さんの亡くなった命日である三日という日にお参りに行っているわけです。今はその小学生のお姉ちゃんと妹さんがですね、一生懸命お父さんに『正信偈』を教えてください。お父さんの方がたどたどしいです。二人はもうしつかりした声で読んでます。

(5)
でもお母さんがいない現実があります。学校から帰ってきてても家には誰もいないわけです。そうすると妹さんの方が先に帰ってきて鍵でドアを開けて家の中に入る。「ただい

ま」と言っても「おかえりなさい」という声は聞こえないわけです。今まではそれが聞こえていた。でももうその声がない。そしてお姉ちゃんが帰ってくるまでの間、お父さんが帰ってくるまでの間、これはもう想像しかありません。二人の姿をみていたらそんなことはわからないですけど、きつとお姉ちゃんにしても妹にしてもお父さんにしてもどこかで一人で涙を流していると思います。月命日にお参りに行っている時は朗らかな三人の家族として温かさを感じますけど、一人一人になった時、部屋で、お風呂で、トイレでお母さんを出しながら涙しているのではないかな。しかし朗らかで、温かさを感じるんです。三人が三人の家族で支え合って、一生懸命生きていくという姿勢です。

また二人の小学生は女性ですからこれからお母さんに料理を習ってお母さんの味を覚えて、そして裁縫を習って、色んなことで女性として成長していく時、先輩の女性としての嗜み、生き様、それを目の前で教えてくれる人がいないわけです。でもお父さんはお父さんでこの子達をなんとか一人の人間に育てようと一生懸命支えて、努力をしている。何かその姿ですよ、生きる姿勢です。ブレてないんですよ。先程の日大の監督とコーチのようにブレないんですよ。帰るべき所を知っている。大切なお母さんを無くした。その無くなった中でこの子達と私が一緒に歩んでいこうという姿勢、帰るべき所を持つている姿勢が、私に改めて大事なことを伝えてくれています。

そういう出来事が五月の連休にあつて、今度は七月上旬のことですけど、これはお預かりしている他のお家の小学三年生の男の子です。今度もまた私に見失っていたものを気づかせて下さいました。

そのお家には夕方にお参りに行つたわけですけど、ちょうどその小学校三年生の男の子が学校からスクーリングバスで帰って来て家にいる時間帯だったんです。御内仏の前でのお勤めが終わって、茶の間でコーヒーを飲んでいる時に、男の子がこんなことを私に語りかけてきました。

「今日、学校の国語の時間で、家族の様子というのを発表してきました。」「じゃあ、どんなことを話したんですか」と聞いたら、男の子はランドセルから国語のノートを開いて、これやと言つて見せてくれたんです。それを見ながら途中でくすくすと笑つてしまつたんです。そこにはこういう言葉で家族の様子ということが語られていました。「うちの大大おばあちゃ

ん、寝てばかりです。なんにもして
てくれない。話もしてくれない、遊
んでもくれない、小遣いもくれない」、
ここで笑ってしまったんです
ね。なかなかいいこと書いてあるな
と思つてクスツて笑つてしまつたん
です。その後、逆に笑つたことが恥
ずかしくなりました。

そこで終わつてないんです。まだ
言葉が続いている。こんな言葉が続
いていました。「だけど、大事なこ
とをしている。一生懸命生きている」
これだけの言葉です。この「だけど」、
ここですよ。『だけど大事なことを
している。一生懸命生きている』、こ
の言葉をです。笑つた後に読んだ
時、本当に恥ずかしくなりました。
またやつてしまったなど。全くその
ことに気づかない。

もしも私がですね、過去の小学生
に戻つて家族の在り方を書きなさい
という宿題がでたら、私なら「小遣
いもくれない」、ここで終わります。
家族の様子ですから、それを書けば
それでいいわけです。私ならそこま
でしか書けないです。しかし、その
三年生は、その後に「だけど大事な

ことをしてる。一生懸命生きている」
と。この小学校三年生の男の子の命
の感性。命の感性ということと、眼
です。大ばあちゃんを見る眼。驚き
ました。

一生懸命生きている

『阿弥陀経』というお経の中に五つ
の濁りという言葉が出てくるのを皆
さんもご承知かと思ひますが、そ
の一番最後に「命濁^{みょうじよく}」、命の濁りと出
てきます。命の濁りです。私の命の
濁りです。

大ばあちゃんは家で在宅介護し
て、家族中に見守られて生活してい
ることは知っているわけです、私も。
それで大ばあちゃんの部屋に行つて
声を掛けたりするわけです。大ばあ
ちゃんがそこに居られることも知つ
ている。寝たきりだということも
知つている。ところが小学校三年生
の男の子が「大事なことしてる。一
生懸命生きている」というような眼
や命の感性は、私の中には湧いて来
ませんでした。湧いてこないとい
うか、無かつたと言つてもいいでしょ

う。無いんですよ。つまり命とい
うこの眼を濁らせている眼です。い
ることは知つていても、声を聞いて
も、顔を見ることをしても、一番大
事なことに気付かないという濁り
です。

お年寄りが介護の状態でそこに
いる。家族からみたら大事な存在
から、いつまでもいてほしい。尊
存在だからできるだけ長くこの家
にいてほしい。そのいてほしいとい
う思いの中心は何かというと、一生
懸命生きているということでしょう。
居るといふことと、尊いといふこと
を具体的に表すといふのは、その人
が一生懸命に生きている姿です。と
ころが私には居ることは知つてい
るんです。尊い存在やとも知つてい
るでも見えなかつた。

「何にもしてくれない、でも大事な
ことをしてる。大ばあちゃんは一生
懸命生きている」この命の感性です
よね。その国語の宿題を手渡されて
よ。その国語の宿題を手渡されて
読んだ時、最初笑つて、そしてその
後の言葉読んだ時、本当に恥ずかし
くなりました。私は何を見ていたの
だろうか。そこにその人がいるにも

関わらず、大事なことをしていると
は見えなかつた。一生懸命生きて
いる。小学生の大ばあちゃんからみ
ればひ孫にあたる方はちゃんとそれ
が見えるわけです。その小学校三年
生の男の子が「大事なことしてる。一
生懸命生きている」、この言葉を書
いた背景です。背景があるから小学
生の男の子は書けるんです。

それは何かというと、大ばあちゃ
んにしてみれば息子さんに当たるお
じいちゃん、おばあちゃん、そして
孫に当たるお父さん、お母さん、そ
してひ孫に当たるお姉ちゃん二人と
男の子、その家族が大ばあちゃんに
どういう風に接しているかが映つた
んでしょう。家族が大ばあちゃんを
無視したり、邪魔者のように扱つて
いるように接する姿が男の子に映つ
たらあの言葉は出てこないはずで
す。きつと、「なんにもしてくれな
い、話もしてくれない、遊んでもく
れない、小遣いもくれない」で終わ
っていたでしょう。でもその言葉が自
分の言葉として、声として出して書
いた。書いたということは、家族が
その大ばあちゃんにどんな関わりを

しているのか見えるから書けるんでしよう。一人一人が大ばあちゃんを大事に扱っているからでしょう。大切に、もしもこれが先ほど言いましてのように、無視したり、邪魔者のように扱っていたらどうでしょうか。

家族の背景まで見えるんです。家族一人一人が大ばあちゃんと向き合いつながり、そしてその大ばあちゃんと同じ向き姿勢が小学校三年生の男の子には温もりのある家族として見えてきたからこそ、そこに大ばあちゃんの方が大事なこととして、一生懸命生きていた姿が映ったんですよ。だから本当に何かそこにですね、家族の繋がり、人と人との繋がり、関わりを通して、私達が普段忘れていたようなことをまた一人の男の子が言葉として教えてくれました。

父の介護

同時にその頃ですね、七月の上旬、実は私自身も自分の父親の介護の事で汲々とした状態でした。九四歳になる父親が急に歩けなくなりました。もう本当に寝たきり状態

で立ち上がることができない。そういう中でケアマネジャーと相談して家ではとても介護が出来ない。トイレもお風呂も食事もちよつと無理です。これを家族でするのは大変なので、老人介護福祉施設に入っていたのですが、お昼を食べてからですね、父の個室の部屋に訪ねて行って、そして夕食が終わるまでずっとそこで父親と過ごしていました。ところが、いつの間にか夕食に間に合うように家を出て、夕食が終わってしばらくしてから家に帰ってくる。今度は夕食ギリギリに行くと、夕食済んでから少し話をしながら帰ってくる。それが次にはどうなったかというところ、夕食が終わった時間に行く。そして顔を見ても帰る。

実はこういう状態の時に小学校三年生の男の子の国語の宿題を見せていただいた。ハッとしました。自分を今日まで育ててくれて、色んなことを教えてくれた父親に対して、最初はお昼過ぎから夕食終わるまでずっといたものが、だんだんだんだん個室にいる時間が短くなって、も

う五分もない状態。顔見て帰る。顔見て帰るといのは、言葉悪いですけど、今日も生きとったなと確認するために行ってたようなものです。今日も無事やったな、その確認をするための時間が五分だった。その時には父親が一生懸命生きていたといふことは思いもしないし、気づかなかった。その小学生の言葉と出会った時、愚かというか恥ずかしいというか、何をしようとたんかなと。一体私という存在は何なのか。何を大事なこととしていたのだろうか。

結局自分もあの日大の監督とコーチと同じことをやっている。自分を守る為、自分を弁護する為に顔を見に行っていたのかな。帰るべき所、一人の人間が一生懸命生きていたという原点を見ていなかったんですね。本当に恥ずかしい。小学生の言葉を通して改めて自分というものの正体が暴かれた瞬間でした。

自分の正体

昨日も申しているんですけど、私は当たり前前のようになっていくん

です。慣れつこのように日々の生活が済んでいきます。いつの間にかそれが当然のようになっていく。当然になつていけばいくほど帰るべき所が見えなくなる。その見えなくなつた時に、自分の在り様を指摘してくれる人の言葉に出会うと、そこでハッと気づくわけです。気づいた時自分が本当の自分の正体です。紛れもないその自分の正体に会わなきゃならんのです。

現在の日本では宗教というものが、自分の願いや希望を叶えてくれる方が、宗教だと受け止めている方がほとんどです。最初から自分の願



や希望を叶えてくれないものは、宗教として見ていません。逆に現代を生きている現代人から見れば、浄土真宗というのは宗教ではないと見られます。何故かといえますと、一番

自分を誤魔化していきます。でも会った時、そこから始まるわけです。会って恥ずかしさを感じ、愚かさを感じたところから、一歩が始められる。

小学生が教えたこと

小学生の「大事なことをしている。一生懸命生きている」、この言葉が本

にもない。家内安全になるわけでもない。自分の正体を教えてくれるわけですから、現代人と呼ばれる私達にとって一番会いたくない宗教です。私達が一番会いたくないのは何か、自分です。

当に私にダメージを与えました。父親が生存していることをただ確認しているような在り方が、違いました。恥ずかしさを知り、愚かさを知ってから、やっぱりその一日一日を生きているんだなとそれまでしたことな

から、自分と会いたくないんです。人から自分のことを指摘されると弁護するでしょう。誤魔化したり、飾ったり、自分というものに会いたくないのが私達です。その自分を知れ、自分に会いなさいよと。人を通して、

そこをもう一回教えてくれた。もしもこの小学校三年生の男の子や、この小学生の姉妹の姿を見ていなければ当たり前のように過ぎ、当たり前のように日々を送って痛みも悲しみも何も感じないまま、ただそこ

教えの言葉を通して自分に会いなさいよ、これが親鸞聖人が私達に念仏を申せよと勧められている中身です。だから現代人である私達にとっては一番会いたくないものです。その会いたくない自分に会わないと、

の男の子のその姿と言葉が私に大事なことをもう一回教えてくれた。もしもこの小学校三年生の男の子や、この小学生の姉妹の姿を見ていなければ当たり前のように過ぎ、当たり前のように日々を送って痛みも悲しみも何も感じないまま、ただそこ

に人が居るということだけ見ていたのではないか。そういう自分の在り様をですね、小学生達から教えていただきました。もしも教えてもらえなかったら、傲慢な私になっていた。自分を知らなかったら、どん

いける場、これが私は報恩講という一番大きな仏事、その御縁がこうやって今、勤められたのだと思えました。二日間を渡って本当にお世話になりました。ありがとうございました。

編集後記

◇本文は平成三十年十月十八日、浄光寺「報恩講」結願日中の法話録であります。洵に勝手ながら紙片の都合上、割愛、編集させていただきます。

行事のご案内

「除夜の鐘・修正会」

「除夜の鐘」

日・令和二年大晦日
時・午後十一時半

「修正会」

日・令和三年元旦
時・午前零時

「きこまいけ報恩講」

十一月二十八日・午後二時
※十二月から二月まで「きこまいけ」は冬休みをいただき休講となります。三月二十八日より再開いたします。